松ヶ岡開墾場
― 歴史を訪ねる旅（9）

下土橋　渡

庄内藩（今でいう山形県鶴岡市、酒田市）の藩主や藩士たちは、戊辰（ぼしん）戦争の戦後処理で西郷隆盛の下した処置が温情ある極めて寛大ものだったことに感じ入り、西郷に教えを請うようになり、やがてその教えを『南洲翁遺訓』という一冊の本に編集して出版し、全国に配り歩き始めました。そして、後年財団法人荘内南洲会が設立され、酒田市に南洲神社が創建されました。

一方、鶴岡市は、愛読した時代小説家・藤沢周平さん（一九二七～一九九七年）の出身地です。南洲神社とともに藤沢文学の面影を鶴岡に訪ねたいという長年の夢を叶えるべく初めて庄内を訪れたのは、二〇一〇年三月末のことでした。山形市内でレンタカーを借りて、妻と二人連れの山形市内から庄内への日帰りドライブは、県内陸部と庄内地方を結ぶ月山（がっさん）道路を通ります。道路沿いは積雪を残したままでした。車窓から遠望する鳥海山、裸木のケヤキ並木が独自の風景をつくっていた酒田の山居倉庫、南洲神社、藤沢小説の舞台を彷彿とさせる鶴ヶ岡城跡、質実剛健な教育文化を今に伝える庄内藩校致道館（ちどうかん）など、有意義な庄内巡りでした。

しかし、そのとき、鶴岡市内にある『松ヶ岡開墾場』の存在をまだ知らなかったのです。知ったのは、それから二年後の二〇一二年二月に、縁あって、元世界銀行副総裁・西水美恵子さん（イギリス領ヴァージン諸島在留）の『庄内憧憬　歴史が醸し出すオーラの漂う

場所』と題するエッセイ（出羽庄内地域文化情報誌二〇一一年九月号）を読ませて頂いてのことでした。そして、今年（二〇一七年）六月に念願だった『松ヶ岡開墾場』の訪問を果たしました。

明治維新ののち、明治七年（一八七四年）になると、西日本を中心に相次いで不平士族の反乱が起きます。明治七年の佐賀の乱、明治九年の熊本神風連の乱、福岡秋月の乱、山口萩の乱、そして、最大規模の士族反乱として明治十年（一八七七年）に西南の役が起きるのですが、こうした反乱と対照的だったのが旧庄内藩の取り組みでした。

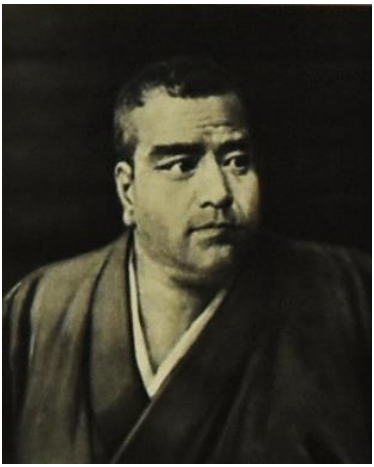
戊辰戦争に敗れた庄内藩の復興において中心的な働きをした旧藩中老・菅実秀（すげさねひで）（号を臥牛という）は、明治維新直後の廃藩置県の折、旧庄内藩士の先行きを考え、養蚕によって日本の近代化を進め、庄内の再建を行うべく開墾事業に着手するのですが、実はこれは西郷隆盛の勧めによるものでした。

一、南洲翁と菅臥牛翁

西郷の厚遇によって藩の危機がすくわれたとたいへん感動した菅実秀は、以後西郷に師事、西郷の指導を仰ぎながら、敗戦後の庄内藩の再建を進めて行くことになります。西郷もまた、自分を頼ってくる庄内藩の人々の心事に感じ入り、その復興を助けました。

酒井忠篤公は、明治三年（一八七〇年）十一月、菅の勧めにより、藩士七十余名を率いて鹿児島を訪れ、約半年滞在し、親しく西郷の教えを受け、寝食を共にしました。そして、翌四年、菅自身も上京し、西郷との初めての会見を果たします。菅は西郷より二歳年下。まるで古くからの友人のように互いに喜び合い、その様子は『敬すること兄のごとく、親しむこと弟のごとき』であったといいます。

菅臥牛翁（菅実秀）



南洲翁（西郷隆盛）

鹿児島市武町の西郷屋敷跡と酒田市の南洲神社には、二人が対話している座像『徳の交わり』像が建てられています。

刀を鍬にかえて ― 松ヶ岡開墾記念館（１番蚕室）の展示パネル

こうして西郷南洲翁と菅臥牛翁の交情が深まっていきました。

これが縁で後年、鹿児島市と鶴岡市は兄弟都市の盟約を結び、親善使節団の相互訪問、兄弟校の提携、中学生親善使節団の相互派遣、青年国内研修生の交流などが現在も続けられています。

二、松ヶ岡開墾場

明治四年（一八七一）に廃藩を迎え、庄内藩は、大泉県そして酒田県となりました（その後、明治九年に山形県に編入）。酒田県権大参事となった菅実秀は、庄内藩の存続に力を寄せた西郷隆盛にもはかり、家禄の減少で生活に困窮する旧藩士族の救済や殖産を目的として、鶴岡東郊で大規模な開墾事業を計画しました。

明治五年四月、手始めに旧藩士三六〇人を六組に編成して鶴岡東郊の荒蕪地三万坪を一か月余りで開墾。その後、月山山麓後田村の広大な山林の開墾をねらい、旧藩士卒約三、〇〇〇人を三四組に編成し、八月から一〇〇余町歩の開墾に着手しました。士卒は銃・刀を鍬に持ちかえ、苦労のすえわずか五十八日余で全域の竣工を迎えましたが、困難を伴う作業の中で脱落する者も少なくなかったといわれます。開墾の本部として、開墾地内に藤島村の旧本陣の建物を移築し、松ヶ岡本陣と呼んで、集会所・事務所としました。明治六年からは茶の栽培・桑園開発をはじめるとともに、さらに二〇四町歩に及ぶ広大な山林荒蕪地の開墾をなしとげ、開墾は軌道に乗りはじめます。

明治七年末からは蚕室の建設にとりかかり、明治八年四月、鶴岡城の屋根瓦を運搬して上州方式の三階建て蚕室四棟が完成。明治九年には、同様の構造の蚕室四棟を新築して

国指定史跡・松ヶ岡開墾場。建物は庄内農具館（４番蚕室）

松ヶ岡開墾記念館（１番蚕室）の前では、ダリアの植え付け準備中でした。その奥は、おカイコさまの蔵（３番蚕室）。

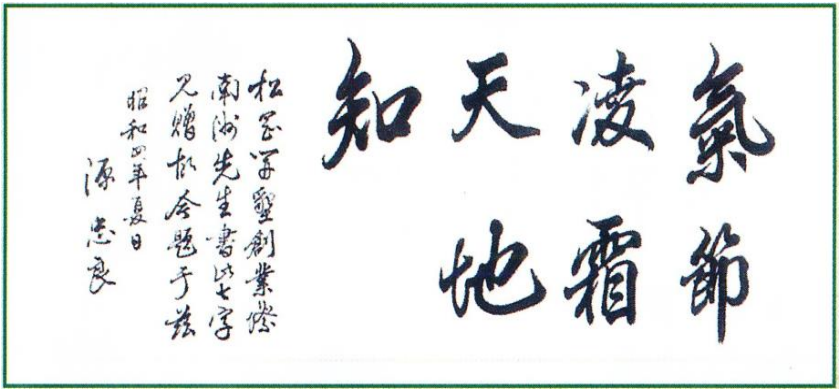
製糸を開始、さらに旧藩廐舎古材を利用して蚕室二棟を建設しました。その後明治二十年（一八八七）に製糸工場を鶴岡に創設して本格的な生糸生産も起こしました。

松ヶ岡開墾場は、明治初年において北海道開拓とならんで行われた士族授産・殖産のための開拓の遺跡としての歴史的重要性の高さから、平成元年（一九八九年）八月、国の史跡名勝天然記念物に指定されました。今日なお、開墾当初の土地所有・利用形態の遺制も残し、なかでも開墾中心部には、東西方向二列に配置された三階建ての一番～五番蚕室、本陣、蚕業稲荷神社などの建物が明治初年の面影そのままに開墾当時の雰囲気を今にとどめています。（以上、国指定文化財等データベース（文化庁）を参考）

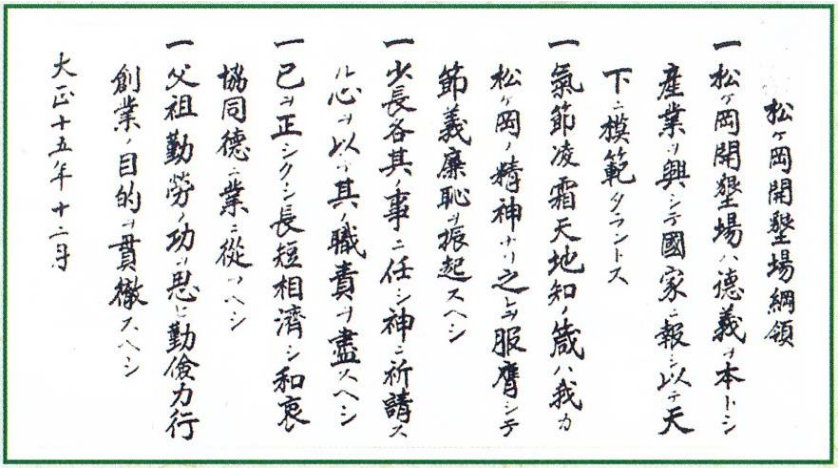
現存する五棟の蚕室は現在、一番蚕室が修復されて松ケ岡開墾記念館となっているほか、庄内農具館（四番蚕室）、おカイコさまの蔵（三番蚕室）、庄内映画村資料館（五番蚕室）などとして利用されています。

三、『気節凌霜天地知』

明治三年（一八七〇年）に酒井忠篤公とともに鹿児島を訪ね南洲翁に教えを受けた旧庄内藩士七十六名もその後開墾に従事し、また明治三年以後八年十月までの間、東京あるいは鹿児島において直接南洲翁の教えを受けた三〇余名の旧藩士もまた松ヶ岡開墾の幹部でした。明治七年十一月に松ヶ岡開墾の幹部二名が鹿児島に赴いて教えを受けた時、開墾士一同に対する箴言（しんげん）（教訓の意味をもつ短い言葉）の揮毫をお願いしたところ、南洲翁は、『気節凌霜天地知』の七文字を書き与えました。『困難に直面しても、それを凌ぐ強い心意気、意志があれば、天は見ている。必ず苦労に、こたえてくれるものである。』という意味



『気節凌霜天地知』（きせつりようそうてんちしる）　明治７年 11 月に西郷隆盛が開墾士に与えた箴言（困難辛苦に遭遇したときにもそれを凌ぎぬく強い心を以て取り組めば天地の神も之を知り応えてくれる）。
旧庄内藩酒井家 第 16 代酒井忠良書。（松ヶ岡開墾記念館パンフレットより）



大正 15 年 12 月に掲げられた松ヶ岡開墾場綱領　２番目に、『気節凌霜天地知』の箴（いましめ）は我が松ヶ岡の精神である。心にとどめて忘れることなく、節度を守って正義を重んじ恥を知る心で奮起すべきであるとあります。（松ヶ岡開墾記念館パンフレットより）

庄内映画村資料館（５番蚕室）

松ヶ岡本陣。藤島村にあった旧本陣の建物を松ヶ岡開墾場内に移築したもの。集会所・事務所として使われました。

で、松ヶ岡開墾事業の精神となりました。

後年、松ヶ岡開墾場綱領に取り入れられ、その第二条に、『気節凌霜天地知の箴（いましめの言葉）は我が松ヶ岡の精神なり、之を服膺（心にとどめて忘れず行うこと）して節義廉恥（節度を守って正義を重んじ恥を知る心）を振起すべし。』とあります。

現在でも、毎年四月に開催される開墾記念日には、旧庄内藩主・酒井忠篤公と松ヶ岡開墾の志を支えた西郷隆盛、開墾開拓に取り組んだ重臣の菅実秀の肖像額を飾り、床の間には西郷隆盛より頂いた『氣節凌霜天地知』の箴言の掛字を掲げて式典が催されるそうです。

― 補遺 ―

開墾地といえば、鹿児島市中心部から北へ約十キロメートルの、吉野台地の高所に位置する寺山に東郷平八郎の筆による『南洲翁開墾地の碑』があります。遣韓使節をめぐる政争に敗れて帰郷して二年後の明治八年（一八七五年）、西郷隆盛もまたこの地に吉野開墾社を設立し、元陸軍教導団の生徒一五〇名とともに開墾事業を始めました。西郷自身も武村の自邸からせっせと通い、生徒たちとともに鍬をもちました。昼は農業、夜は学問に励むこの学校は、三十九ヘクタールという広大な土地を開墾し、事業は軌道にのったかに見えました。ところが時代の波は、西郷の意志に反して、西郷を大乱の首魁へとまつりあげました。自ら農夫となって士族の将来をひらこうとした西郷の夢も西南の役の敗北とともについえたのでした。庄内の人々に松ヶ岡開墾を勧め、『氣節凌霜天地知』の箴言を贈った西郷の開墾の夢もまた『松ヶ岡開墾場』と同様のものだったに違いありません。

（元九州職業能力開発大学校教授）